



民主 苦小牧号外
2026年
8.30
No.1154

日本共産党市議会議員

小野寺ゆきえです！



自分が幸せなら、平和の波紋が広がる

先日、白老町で『戦争体験を聞くつどい』が開催されると聞き、私も参加して来ました。お話しは、90歳の福島ひろこさんと84歳の岡沢あきこさんです。

福島さんは利尻島に住んでおり、終戦を食料の買い出し先の浜頓別で迎えたそうです。9歳だった福島さんは、大人たちがラジオの前で泣いたり、うなだれたりしている姿が不思議だったと話します。

学校では、立派な奉安殿から出す教育勅語に最敬礼し、毎朝唱えていたそうです。ソ連が参戦してからは、「ソ連が攻めてくる」と怯える生活だったと言います。

福島さんは、「こんなに幸せで良いのだろうか」と自問自答しつつ、「孫から、おばあちゃん元気？と電話をもらうだけで幸せ。自分が幸せなら、水に石を投げた時のように平和が広がっていく」と語りました。

東京出身の岡沢さんは、疎開先で東京大空襲を免れたそうです。しかし避難所になっていた明治座の地下に逃げ込んだ数百人の人々は、爆撃で亡くなったと話します。

東京に戻った岡沢さんは飢餓とのたたかいで、「ふすましか食べるものがなかった」と話します。「ふすま」って何だろう」と調べてみると、小麦の外皮や胚芽の部分で、米や小麦粉が手に入らない戦時中や戦後に食べていたものだと分かりました。「少しでも空腹を満たし、生き延びるために食べていた」という記述もあります。

東京中が飢餓に苦しみ、親を亡くした子どもたちで溢れていたそうです。空き缶を置いて物乞いをする孤児がたくさんいたけど、空き缶の中には何も入っていなかったと言います。「今は、食べられるだけで幸せ。今の日常があるのは、平和だから」と語る岡沢さんの言葉に、とても重みを感じました。

2人の話しの後、フロアの参加者からも発言がありました。その中で私が印象的だったのは、「戦争の体験を、親たちから聞いたことがない」という発言が多かったことでした。「聞いてはいけないと思った」とか、「話したくないんだと感じた」というのです。

それだけ、戦争体験は思い出したくない苦しみや恐怖があるのだと思います。また、辛い加害の経験もあるかもしれません。今回の体験談を聞いて、平和の手がかりは、“幸せ”なのだと感じました。